論文の内容の要旨

氏名：八　木　廉　平
専攻分野の名称：博士（医学）
論文題名：再発肝細胞がんにおける再肝切除の適応基準についての検討

論文内容の要旨

背景：肝細胞がんは、根治切除を施行しても多中心性発がんや肝内転移により高率に再発する。肝細胞がん再発に対しての治療は、初回肝細胞がんの治療と同様に治療方針を決定することがガイドラインでも推奨されているが、再肝切除とその他の局所療法を比較したエビデンスレベルの高い論文はない。今回、再肝切除の適応基準を決定するにあたり、当院における、治癒切除後の再発肝細胞がんに対する再肝切除と経皮的冠動脈化学塞栓療法の治療成績を比較検討した。
方法：肝細胞がんの根治切除後に肝内再発（3 結節以下）した患者に対して再肝切除（n = 210）を施行した群と経皮的肝動脈化学塞栓療法（n = 184）を施行した群に分類し、治療成績について比較検討した。再肝切除の妥当性について予後因子に基づいて予後予測スコアを作成し検討した。
結果：再肝切除群の生存率について Cox-hazard モデルにより①75 歳以上、②腫瘍径 3 cm 以上、③多発が全生存に寄与する独立因子であった。この 3 因子について当てはまる項目数により予後予測スコアとしてスコア 0 から 3 まで振り分け、再肝切除を施行した 210 例について生存期間を解析した。生存期間の中央値は予後予測スコア 0、1、2 / 3 点でそれぞれ 7.9 年（95% confidence interval [CI] , 5.6 – NA)、4.5 年（3.8 – 6.2)、2.6 年（2.1 – 5.3）で有意差を認めた（P < 0.001)。スコア別に再肝切除群と、経皮的肝動脈化学塞栓療法群を比較すると、スコア 0 では中央値 7.9 年（95% CI, 5.6 – NA）対 3.1 年（2.1 – 3.7), P < 0.001）で再肝切除群のほうが有意に生命予後は良好であり、再肝切除が独立因子であった。一方で、スコア 2 / 3 では各群の全生存の中央値はそれぞれ 2.6 年（95% CI, 1.9 – 5.3）および 2.3 年（1.6 – 2.8）であり、有意差を認めなかった（P = 0.176)。
結論：再発肝細胞がんにおいてスコア 0 の患者に対しては再肝切除を、スコア 2 / 3 の患者に対しては経皮的肝動脈化学塞栓療法を第一選択の治療法とすべきである。また、スコア 1 の患者に対しては再発時の肝機能等によって治療法を選択すべきである。